エッセイ

『JOE－千里を馳す－』について

石　村　えりこ

このシナリオは、2020年に開催された「第26回函館港イルミナシオン映画祭」のシナリオ大賞でグランプリ（函館市長賞）を受賞した作品です。

毎年12月に行われる函館港イルミナシオン映画祭には、全国から映画ファンが訪れます。シナリオ大賞は、函館の街から新しい映画及びその人材を発掘・発信することを目的に、1996年から始まりました。これまでに長編・短編合わせて12本のシナリオが映画化・映像化されています。

今回の審査員は、作家の荒俣宏さん、映画監督の大森一樹さん、プロデューサーの河井信哉さんでした。三人の審査員の先生方全員一致でグランプリに選んでくださったそうです。

◯執筆のきっかけ

函館の映画祭に応募するのであれば、函館を舞台としなければ成立し得ない物語にして、地元の皆さんに喜んでいただけるような作品を書こうと決めていました。

ちょうどそんな折、北海道大学名誉教授の小野有五先生から、新島襄が箱館港から密航する際のエピソードを教えていただいたのです。彼を手助けした箱館の青年たちとの交流がたいへん面白く、ぜひシナリオにしたいと思いました。

◯タイトル

函館にはこれまで何度も訪れています。もう10年以上も前のことですが、市街を散策中にふらりと入った喫茶店が「JOE」という名前でした。店を出た後で、ようやく店名の由来がわかりました。すぐそばに、「新島襄海外渡

航の地碑」が建っていたからです。残念ながらそのお店はもう閉じてしまったようですが、新島襄という人は函館の人々に愛されているのだなという印象は、私の中にずっと残っていました。

今回はなかなかタイトルが思いつかず、仮に「JOE」とつけて書き始めました。すると、まるでそのタイトルに導かれるように、ラストがピタリとはまりましたので、これでよかったのかなと思っています。

○登場人物たち

今回は登場人物を極力少なくし、物語を複雑化するよりも、キャラクターをはっきり描き分けることに気を配りました。

作品では主人公の新島さんを支える 3 人の青年が登場します。

菅沼精一郎さんは、新島さんの記録以外に史料を見つけることができず、長岡藩士だということしかわかりませんでした。でも、“米百俵”の長岡藩の出で、師から塾の後始末を任されたれた塾頭という二点からだけでも、謹厳実直で、責任感が強く、面倒見がいい、といった人物像が浮かんできました。

沢辺数馬さんは、血筋を聞いただけで、もうただ者ではないとわかります（実際、沢辺さんはその後も波瀾万丈の生涯を送ることになります）。土佐弁には苦労しましたが、何とかそれらしく仕上げました。

3 人の中では、福士卯之吉さんだけが生粋の箱館人です。新しいものをどんどん受け入れる、当時の箱館の町の雰囲気を体現したような人物にしたいと思いました。

ストーリーは史実を基にしたフィクションですが、彼らが自らの危険を顧みず、また何の見返りも求めずに、新島さんを助けたことは紛れもない事実です。なぜそこまで？と不思議なほどですが、それも新島襄という人の魅力ゆえ、なのでしょう。

新島さんは、一途で、意思が強く、努力を厭いません。そんなひたむきな姿に、周りの人たちはいつの間にか感化され、自分が果たすべき役割は何だろうと自問するようになる……。私はそんなふうにとらえました。化学反応の触媒のような存在です。

なお、おときという女の子だけは私が創作した人物です。一人くらい女子も入れないと、という単純な理由からでしたが、いろいろと活躍してくれました。

函館には「五島軒」という明治期創業の老舗レストランがあります。創業者夫人はなんと福士卯之吉さんの姪御さんとのことです。また、初代料理長の五島さんという方は、ハリストス正教会でロシア料理とパンの焼き方を学んだそうです。そうしたエピソードから発想しました。

○物語の背景

幕末、箱館は独自の発展を遂げました。きっかけは、嘉永 7 年（1854）に日米和親条約が締結され、下田と箱館の二港が開港したことです。その際、ペリー提督が箱館にも上陸していることは、一般にはあまり知られていないのではないでしょうか。

今回の作品は、それから 10 年後の元治元年（1864）を描いています。実は、新島さんが渡航するほんの数日前には、京都で池田屋事件が起きています。でも、もちろん登場人物たちはまだそのことを知りません。幕末動乱の波は、箱館にまでは達していないのです。

4 年後の箱館戦争で旧幕府軍を率いる榎本武揚は、作品中の台詞にもあるように、この頃は官費でオランダ留学中です。

そうした背景や、箱館の特異性を念頭に置いて書きました。

○おわりに

とにかく、明るく前向きな作品を目指しました。作品を執筆したのは、コロナの第 1 波・第 2 波の頃でした。先の見えない不安の中で、理不尽な差別や中傷も聞かれましたから、人の誠実さを信じられるような作品にしたいと願いました。

読者の方が（映画化を実現させて、観客の皆さんが、と申し上げたいところですが……）、少しでも明るい気持ちになってくださったら、嬉しいです。

執筆にあたっては、数多くの資料を参考にしました。この作品を書くことができたのも、新島さんの研究者・歴史家の皆様のこれまでのご研究のおか

げです。

最後に、本誌に掲載の機会を与えてくださった本井康博先生、小野有五先生に、心より感謝申し上げます。

○プロフィール
石村　えりこ（いしむら　えりこ）
福島県出身。東京都在住。東京女子大学卒。
受賞歴は「第 31 回城戸賞」準入賞、「函館港イルミナシオン映画祭第 11 回シナリオ大賞」準グランプリ、「同第 23 回シナリオ大賞」あがた森魚賞（特別賞）ほか。
舞台作品に『明治の兄弟～山川家の人々～』（「ふくしまの歴史と文化の再発見演劇祭」入賞作品）。映画『武士の家計簿』脚本協力。